

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



竹富島出身の幸本宏助^{こうもとひろすけ}さんは、口数の少ない物静かな人で、丁寧な仕事ぶりからは、職人氣質な人柄が伺える島人だ。最近、畑をやりながらヤギのお世話をしているが、以前は茅葺き屋根や赤瓦屋根の葺き替え、グック（石垣）積み^{グック}の仕事を長年に渡り行ってきた。まさに職人としての気質を生かす仕事だ。

戦後は竹富島には仕事がなく、西表島で暮らす姉を頼って隣島へ渡り、パイン作りやサトウキビ作りの仕事をしていた。後に製糖工場でも働いていたと話す。

「大変だったよ」と一言ぼつりと呟く。

2011年の東日本大震災が起こった春、東京から私の姉が幼い息子を連れて竹富島に避難してきた。私にも幼い娘がいて、私たちは毎日ベビーカーに子どもたちを乗せて島を散歩していた。そんな時に見かけた風景の中で1番印象に残っているのが、宏助さんの姿だった。

白くて小さい子ヤギが、ピョンピョンと宏助さんの周りを飛び跳ね、しゃがんでいる宏助さんの背中や肩に飛び乗っていた。宏助さんは終始満面の笑顔だった。震災のことや幼い子どもたちのお世話で疲れ果てていた私たち姉妹は、その笑顔と無邪気で愛くるしい子ヤギに、そして宏助さんと子ヤギの関係性に救われた。

あの時から、そろそろ13年の月日が経とうとしている。

先日、宏助さんに会いに行くと、ヤギのニーニーちゃんが甘えるように宏助さんの腰に絡みついているのは、時折ツノでグイッと押してやんちゃな仕草を見せていた。「赤ちゃんの頃から、ミルクを与えて育てると懐くんだよ。かわいいよ」と話す宏助さん。

息子の宏二^{ひろじ}さんに宏助さんについて聞いた。

「任された仕事は何でも丁寧にこなす人です。飼う動物はほとんど懐き、カラスでさえも呼んだら飛んできていました。日頃は優しく無口ですが身内には厳しい一面もある頑固おやじです。そんなおやじですが、私が家に帰ると昔話が止まりません。身体も弱ってきているようなので、私もなるべく島に帰るようにしようと思っています」

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右QRコードホームページのContactから。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



石垣島の大浜出身でダンサーの垣花克輝^{かきのはなかつき}さんは、小学2年生の頃から舞踊研究所に通い八重山舞踊を習っていた。外で元気に遊びまわるタイプではなく、どちらかというと静かな方だったけれど、踊りで自分を表現することは好きだったと話す。

踊りは好きだったものの、初めの頃は楽しいことばかりではなかった。当時は男なのに化粧して踊ることに冷やかしの言葉を浴びることもあり、発表会の前にせっかくの化粧を全部落としてしまったこともあった。

小学5年生からはウイングキッズリーダーズに所属し、「現代版組踊 オヤケアカハチ〜太陽の乱〜」に出演するようになった。中学校生活は思春期まっただ中で楽しくなかったが、その頃には自分には踊りがあり、学校以外の居場所があることが自信を持つことに繋がったと話す。

高校ではウイングキッズリーダーズの活動のほか、演劇部に所属し全国大会に出場するなど自己表現の道を模索していた。大学進学を機に東京へと移り住み、大学で出会ったコンテンポラリーダンスを取り入れながら卒業後もダンサーとして活動している。

いずれ石垣島に帰ってきて舞踊の教師免許も取得したいと話す克輝さんは、石垣島でスタジオを開くことを目標にしている。

「自分がやりたいことへと踏み出すのは怖かったり、反対されたりすることもあるけれど、自分の意志をつらぬき実行することで新たな世界が広がること。自分や人を型にはめずに自由でいてもいいのだということ。スタジオでは、自分が体験したことを伝えたいです」

克輝さんは優しい口調でそう語る。そこには筋の通った強さを感じた。

大浜海岸で克輝さんに少し踊ってもらった。海からの風を受けながらゆっくりと舞う克輝さんは、自由に飛び回る美しい鳥が岩に舞い降りてきたように見えた。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右QRコードホームページのContactから。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



竹富島出身の上勢頭^{うせいずりょうや}伶陽^{れいやう}さんは、石垣島の高校を卒業後、京都の大学に進学。現在は大学2年生として文学部に所属し、お寺の勉強と学芸員の資格取得の勉強に励んでいる。

伶陽さんの実家は日本の最南端に位置するお寺、喜宝院^{きほういん}だ。伶陽さんの曾祖父に当たる上勢頭^{うせいずりょうや}亨^{とる}氏が1948年に浄土真宗本願寺派竹富布教所に認可され、竹富島で初代住職として1957年に喜宝院を開院した。上勢頭^{うせいずりょうや}亨^{とる}氏が他界した後、喜宝院^{きほういん}を継いだのは、今は亡き伶陽さんの祖母、上勢頭^{うせいずりょうや}同子^{ともこ}さんだった。

伶陽さんがお寺の勉強をしているのは、祖母の後を継ごうと思ったからだと言う。「自分が継がなかったら多分終わりになってしまうんで。島の人からも継いでほしいと言われていて」と淡々と語る。

京都では、余暇の時間に散歩をしたり、友人たちと川辺で過ごしたりする。「京都は、海から遠いんですよ。それがきついですね。早く海に戻りたいな、行きたいなと結構いつも思っています」と話す伶陽さん。

「海では釣りもよくするんですけど、見るだけでいいです。音と、匂いも、めっちゃ好きです。海は飽きないです。川もいいけど海にはずっと居られます」

大学を卒業した後、お寺を継ぐ前にやってみたい事があるかと尋ねた。

「お笑いに興味があって、大学卒業したら漫才をやってみたいです。お笑いは、センスだと思います。石垣島の成人式の舞台上、友人と一緒に披露した漫才が受けた時は気持ちよかったです」

京都の川辺で漫才のネタを考える伶陽さんの姿を想像する。いつか川の流れるように南へと下り、大きな海を渡って辿り着く竹富島。そこでは将来、お寺の住職をしながらお笑い芸人として舞台に立つという二足のわらじを履く日が訪れるかもしれない。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

●フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右 QR コードホームページの Contact から。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



竹富島出身の藤井可菜美^{ふじいかなみ}さんのことは、彼女が保育所生の頃から知っている存在だ。幼い頃からスッと背筋の伸びた姿が印象的で、18歳の今もその姿は変わらず、凛とした佇まいに芯の強さを感じる。

可菜美さんが保育所生の頃と中学生の頃は、小さな島の小規模校のため、同級生が不在だった。その結果、否応なしに一人で何役もこなしていた。保育所生の時のお遊戯会では、踊りや紙芝居など、いくつもの出し物を一人で披露していて、そのキリッとした表情からは、幼いながらも「一人でもやり遂げなくてはいけない」という責任感が滲み出ている。

中学3年生の運動会では、下級生の仲間たちと一緒にKポップの軽快なリズムにのせてキレイの良いダンスを披露して会場を沸かせていた。可菜美さんが好きなことへと向き合う姿勢に、「責任感」と共に「楽しさ」が垣間見えて、嬉しくなったのを覚えている。中学生の頃に趣味で始めたダンスは、高校のダンス部に入学したことをきっかけに、可菜美さんの高校生活の大きな部分を占めるものとなった。

高校2年生の時には、「離島という小さく、閉ざされた場所から、自分の殻を破り広い世界へと羽ばたく」という物語をダンスで表現し、見事県大会優勝を果たし、全国大会へと出場した。

「ダンス部の存在はたくさんの宝物に出会わせてくれたかけがえのない存在です。高校3年生で一緒だった10人は、本当に仲が良く、個性豊かで楽しくて、青春そのものでした」と楽しげに話す。

可菜美さんは、今年の春に石垣島の高校を卒業し、大阪の学校へと進学する。

「4月からは、大阪の学校で栄養士の勉強をして、卒業後は実際に現場で経験を積み、更に管理栄養士という上のポジションを目指したいです」と話すその姿からは、自然体でありながら「やり遂げてみせる」という自信が滲み出ている。

可菜美さんは今、広い世界へと羽ばたこうとしている。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右 QR コードホームページの Contact から。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



沖縄県名護市で育った内盛良枝^{うちもりよしえ}さんは、保育士の資格を取得したのち上京し、保育士として東京で働いていた。東京で夫の佳美^{よしみ}さんと出会い結婚。2人目の子どもがお腹にいる時に佳美さんの故郷、竹富島に移り住んだ。

良枝さんは、4人の子どもの育てながら竹富島の保育園でも保育士として働いていた。

今から約19年前、夫の佳美さんが56歳で事故により亡くなられた。良枝さんは、今の私と同じ50歳だった。

当時、良枝さんと石垣島のヨガ教室で一緒にいることが度々あった。あの頃の良枝さんの姿は今でもよく覚えている。ここではない何処かに心があるような、ふわりと少し地から体が浮いているような、そんな感じだった。私は、そっとその存在を見守ることしかできなかったが、良枝さんの姿をヨガ教室で見かける度になんだか少しほっとした心持ちになっていた。

「佳美が亡くなった頃の記憶があんまり無いのよ。断片的には覚えているんだけど。あの時、ヨガ教室に通えていて良かった。先生の言葉がずっと入ってきて心が落ち着いた。自然と動けるようになるまでに5年ぐらいかかったね」

その後、良枝さんは保育士を辞め、義母が切り盛りしていた民宿を手伝うようになった。現在は、日用雑貨やお菓子、飲み物や乾物などを扱う小さな商店を開いている。

「私は、不幸だと思ったことはないの。悲しかったけど、自分が不幸だとはこれっぽっちも思わない。子どもたちもみんなそれぞれ独立して元気に過ごしていて、お店も開くことができ、住むところも食べるものもある。自分は幸せだなあと思うの」

良枝さんが紡ぐ言葉の奥に、不思議と佳美さんの存在を感じるの、2人が過ごした時間と記憶が彼女の中に刻まれているからなのではないかと思う。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右 QR コードホームページの Contact から。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー